

---

# 魔王を倒したはずの勇者様は街に帰って来ていません

Mahuyu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王を倒したはずの勇者様は街に帰って来ていません

### 【Nコード】

N4789U

### 【作者名】

Mahuyu

### 【あらすじ】

かつて、街を救った勇者様。しかし、聞く所によると勇者様は街に帰ってきていない。

一体勇者様に何が起こったのか？魔王とは何者なのか？

かつて勇者様が辿った道をもう一度。

## お話の最初に（前書き）

見るに堪えなかつたら即座にタブを閉じることをお勧めします。

## お話の最初に

あれは今から、ちょうど二年ほど前の事。

この街に「魔王」と名乗る者が現れました。しかし、「魔王」と言っても自称で、初めは噂話でしかなかったのですが……。

それから一ヶ月経つと魔王の手下ども（手下と言っても人間）が様々な場所で食い逃げや、水洗トイレを詰まらせたり、え〜と……あれは……そう！ 路上で創作ダンスを踊ったり等、人に迷惑のかかる事ばかりしだすようになりました。

さらにそれから一ヶ月経つと、この街の若者たちの三割以上が魔王の手先になってしまい、その頃の街は……

ガサ、ゴソ、ガサ、ゴソ、

あつた、あつた。

これを見てください。まるで、どっかの アイナル・ アンタジ  
ーみたいでしょう？

けれどこれがあの頃の街並みだったのです。あ、ちなみにそれはケモンセンターですよ。

とにかく、驚かれるのも無理はありません。その時の私たちも驚いたのですから。

なぜって、それは一日で街全体をこんな風に変えてしまったんです。仮に、その力が街の改造以外に使われたとしたら……考えるだけでぞつとしますよ。

そして、それから「魔王を追い出そう」という人が増えました。

「切符がモンスター倒さないともらえないから電車に乗れない！」

「<sup>リアル</sup>現実で体験できるから、ゲームはいらない」とか、言って店のゲームが売れなくなった！」

「何回直しても、水洗便所を詰まらせられる！」

「水漏れの被害が多すぎて会社の休みが無くなった！ 会社は大きくなっただけども……！」

「魔王の手下どものせいであちの店がつぶれた！」  
等々、理由は様々ですが。

とにかく、魔王を倒そうとし立ち上がった人々が大勢いました。  
しかし、そんな事を勢い任せに言ってから、街人達は重大なことに気がつきました。

『魔王つてどこに居んの？』

最初に魔王が名乗りをあげたのは小さくて、古くて、汚い、魔城まじょうでした（ボロアパートともいう）。その頃、魔王は街が立ち上げた掲示板の中で騒いでいるだけで、その頃の魔王を知っている人は皆無と言つていいでしょう。

当然の如く、街人たちはそんな事は知らず途方に暮れ、魔王を倒す！ と、いう熱意も徐々に冷めていきました。

さらにそれから、半年ほど経つと残り少ない若者たちが、「魔王メイガスサーチ・ソサエティ  
搜索会社」（長いのでMSS）を立ち上げました。

理由は様

「飽きたから」

様ざ

「飽きたからだよ」

しくしく

理由は「飽きたから」、らしいです。

最初の方こそ大人たちは馬鹿にしました。

「ガキだけ何ができるんだよ」

「俺たちができなかつたことが、どうやったら元自宅警備員どもに出来るんだよ」

「どうせ失敗して、「俺らはまだ本気を出していない！」とか言うんだろ」

とかなんとか言われましたが、大人たちに馬鹿にされつつもMSSの社員は次々と魔王の目撃情報を集め、ついには魔王の拠点を見つけ出しました。

元々、魔王の手下にならなかつた者たちの大半は、もともと魔王

の手下のようだったのでそういうものは得意だったようです。

しかし、見つけたはいいものも、MSSの社員達は戦力としては役に立ちませんでした。玉碎覚悟で魔王に立ち向かった者も居ましたが、あえなく断念。(一応、大人たちに頼んでみたけれど手下どもにボコボコにされたらしいです)

そこでで立ち上がったのが勇者様です。

勇者様は、聖剣とともに魔王の城(ボロアパート)に向かいました。

それから、五ヶ月間は何の変化もありませんでしたが、半年たったある日、魔王の手先となった若者たちが次々と街に帰ってきました。無論、元の状態です。それから私達がどんな質問しても彼は決まってこう言いました。

「勇者様が救ってくれた」

半ば拷問のように問い詰めても、答えはそれしか返ってこなかったので詳しい事はわかりませんが、とにかく魔王はいなくなり、街は平和になりました。

おしまい

しかし、この話には続きはありません。

若者たちを救った勇者様は、どうなったと思いますか？

街では「名も言わずに立ち去った」と、随分かつこよく言われていますが魔王を倒しに行った後の勇者様の姿を実際に見たのはい人もいません。

ぶっちゃけてしまうと、魔王を倒したはず勇者様は街に帰って来ていません!!

お願いです、もう誰でもいいので街人たちにばれる前に勇者様を見つけてください!!

## お話の最初に（後書き）

最後まで見て頂いた方、本当にありがとうございます。

## 出会い

「困ったもんだ……」

彼「奈野なの 良志人よしひと」は、目の前の紙を見て嘆息した。紙面には

求む！ 救世主！！

と、いう文字がでかかど書いてあった。今、世間では「魔王」という人物が話題になっている。良志人が見ている広告には”それを倒してくれるものを探すもので、賞金は“一千万円”と、とてもなく高額だ。

しかし、良志人にはそれは目に入っておらず、その下に小さく書いてある“全品価格上昇”という文字に目を釘付けにされていた。今、この街「霞ヶ原かすみがはら」では集団による万引き事件が相次いでいて、それによりこの街の店の商品の値段が急上昇している。

主婦たちにとってはかなり厳しい状況であって、主婦のような学生にとっても今の霞ヶ原は苦痛の街と化していた。そして、一人暮らしでその上、主婦の様な良志人にとってはまさに生き地獄。

「今月もピ〜ンチ……。は、ははっ、……………はあ〜」

力無き笑いが良志人の口から溜め息と共に漏れ出る。せめてもの救いは、親から仕送りがちゃんと届いてること。

「明日の弁当どうすっかな……」

現在、良志人の家の冷蔵庫には、数えられるほどしか食糧が無い。買い出しに行っても、近くのスーパーには店員がいなく、誰も買っていないのに商品が消えていき、今では商品がまばらに置いてあるだけで使えるモノがない。簡単に言えば、この街は無法地帯になりかけていた。しかし、そんな中でも学校という忌まわしい機関は働いていて、昼食は弁当持参だった。もちろん、学食はあるが「こんな状況だから」と、安売りをしたのが裏目に出て昼の食堂は「真昼まっぴ間の戦争せんそう」と呼ばれるほど酷いものだった。他の学校でも例外では無く、とある学校ではそれによる犠牲者が千人超えたとかなんとか

……。  
ともかく、良志人は明日の朝食を手に入れる為には戦場に赴かなくてはならなかった。

「俺、生き残れっかな……」

絶望的である。

「せめて一つだけでも買えれば……」

無理である。

ギロツ

っ！？ こつち睨んだ！！

「鬱陶しい蠅だな」

プチッ

良志人は虫を素手で握りつぶすと、そのままゴミ箱へ投げた。  
馬鹿にするのは怖いのでやめます。ごめんなさい。すいません

「はあ、コンビニ行ってみるか」

そう言いながら立ちあがると、家と自転車の鍵を乱暴に掴み取り、家を出た。

それから五分後くらい

自転車をノロノロと漕いでる内に、良志人はあることに気づいてブレーキをかけた。そして頭を抱える。

「財布持ってくんの忘れたああああ！！」

辺りには人は見えないが、いたとしたら寝る子も起きるような叫びだった。しかし、実際には何かが居ると思わせるような音がした。

ガタッ

ちなみに、言っておくがここは路上である。

「ん？」

良志人は音のした方をなんとなく覗き込んだ。が、誰もいるはずも無く……

「……………？」

しばし沈黙。

「うわぁ！！ おい、大丈夫か！？」

もう一度言うが、ここは路上で、見渡す限りでは誰も居ないし、ましてや倒れてる人はいないのだった。

「おい、しつかりしろ！」

なのに、良志人はまるで誰かがいるように虚空を抱きあげている。そのまま、良志人は一人芝居を数分続けた。

分かりにくかった人の為に、ここからは少しだけ良志人ビジョンでお送りします。

ガタツ

後ろで何やら物音がした。気がする。おれは、すぐさま絶叫を中止すると音がした場所を覗き込んで見た。

「……………？」

そこにあつた、いや、居たのは髪がとても長くて、顔がとても整っていて、そんなでもって浮浪者のようにとっても汚い服………というか布を巻いた女の子だった。

「うわぁ！！ おい、大丈夫か？」

半分驚いて、半分どぎまぎしながら聞いてはみたものの、大丈夫そうにはあまり見えなかった。

「うう……………」

「おい、しつかりしろ！」

少し気が付いたようだが、また気を失ってしまった。頬をぺちぺち叩いてみても、女の子は目が覚めなかった。

(どつしよつ……………この子……………)

篠原ひのはらに相談してみるか？ いや、あいつはたぶんこう言った事に慣れていないし、和本かずもともたぶんダメだろう……。他は……駄目だ、おれの友達少ない！！

「うーん」

と、唸ってみても全くいい考えは思い浮かばず、数分経った。

というわけでお分かりになられたでしょうか？ ここからは実際見えませんが、あくまで見えているという設定で進ませてしまいます。

### 数分後

「ふあああ……」

不意に、少女が目を覚ました。それでも良志人まったく気づかずに唸っている。

「うーん」

ツンツン

少女が突いてみても一向に気がつかない。

「うーん」

ゲシゲシ

次には踏んでみた。しかし、良志人は特殊な性癖のためか……

「うわあ！！ 起きたあああ！！！！ ついでにそのの蠅死んどけええええ！！！！」

「わあ！！」

良志人はまず、少女から飛びのいて、ついでに近くに飛んでいた蠅を手刀で叩き落した。(ああ、怖かった……) 少女もそんな良志人に少し驚いているようだった。

「ごめんなさい、驚かせてしまって……」

「いや、こちらこそすみません」

少女はとても礼儀正しく、少し微笑ほほえみながら言った。そんな顔に  
がさつな良志人もおそらく年下の少女相手にも敬語を使って話した。  
「どうして、あんなところに？」

「どうしてと言われましても……」

やはり、がさつな奴は、がさつのままだった。もう少し気のきいたことは言えないのか。少女の方は、そんな人間としてだめでダメで駄目な良志人の質問に戸惑っているようだった。

シュッ

「どうしました？」

「いや、ちよつと虫が」

そう言いながら良志人はおなじみの手刀で蠅を叩き落した。（もう、馬鹿にしません！）

「……………」

「……………」

会話が無くなり二人とも黙り込んでしまつて、その場には気まずい空気が流れた。

「あのっ」

「はいっ」

この気まずい雰囲気になんか耐えかねたのか、少女が口を開き良志人に  
問いかけた。

「あなたは どうしてここにいたんですか？」

「あ、あゝ俺は…… コンビニ！」

ビクッ

さすが無神経男、良志人。少女は少し驚きながらも続けて聞いた。  
「コンビニがどうかしました？」

「俺はコンビニに行こうとしてたんだよ！！」

なぜか握りこぶしを作つて、力説する良志人。手には蠅をつかんでいる。（おそらく無神経男に反応したと思われる）

「では何故ここに立ち止まっているのですか？」

「家に、さ、財布を忘れまして」

良志人のどもり具合が気になるので、ここで再び良志人ビジョン

俺の言いたいことはたった一つ。目の前の彼女はかなりボロい服（布）が”はだけている”！！

そして、物凄く目のやり場に困っている。いや、実際には彼女が思いのほか顔が整いすぎていて、というかとてつもなく美人で、そこから目が離せない。首を掴んで回してみても戻ってしまつかもしれない。そんな事はやらないけど。

とにかくヘルプミー　マイゴツド！！

いやらしい良志人ビジョンはコレにて終了（追加情報、いま少女の服（布）ははだけている）

「あたしの顔に何か付いてますか？」

「い、いえ、な、何もついてませんよ」

（気づくな、気づくなよ）

心の中で祈りつつ、良志人は必死に少女から目を離そうとしていた。だがしかし、良志人は少女の魅了で目が離せない！

良志人はどうする？

コマンド

?・戦う

・呪文

- ・ アイテム
- ・ 逃げる

ピピピッ

- ・ 戦う

- ・ 呪文

- ・ アイテム

? ・ 逃げる

逃げられないッ!

ピッ

- ・ 戦う

- ・ 呪文

? ・ アイテム

- ・ 逃げる

ピッ

? ・ コート (装備中)

・ Tシャツ (装備中)

- ・ 長ズボン (装備中)

・ トランクス (装備中)

- ・ 靴下 (装備中)

・ スニーカー (装備中)

- ・ 自転車

良志人はコートを使った。コートが装備から外れた。

と、良志人の脳内で色々あって着てたコートを渡すことにした。

「さ、寒そうなのでこれどうぞッ!」

「え?」

今度は、少女の方が驚いていた。取りあえずコートは受け取ったが、どうしていいか困っているようだ。

「お願いしますから着て下さい！」

とどめの一撃！ とまではいかないが、少女はうろたえていた。ちなみに、良志人の顔は真っ赤で少女の肌の露出度は31、32、34、37、と徐々に100パーセントに近

パサッ

パサッ？ ……不意に何かが落ちる音がした。ある程度の人はお気づきになられたと思うが、まあ……その……少女の“アレ”が落ちた。

「わっ！」

「ん？」

少し前からこの状況を恐れていた良志人は思わず、と言うよりは反射的に手で目を覆っている。それに対して、少女は首をかしげていた。

只今、少女の肌の露出度は100パーセント……のはずなのだが、良志人は目から手をどけ少女をガン見している。

さすが超変態、肝が据わっている。

……あれ？

当たり前の事だが、良志人の手の中に蠅はいなかった。

少々不気味なので、ここで再び良志人ビジョン。

頭の中で俺のワンターンが終わり、来ていたコートを瞬時に脱ぐと少女に向かって突き出した。

「さ、寒そうなのでこれどうぞッ！」

「え？」

取りあえず彼女は俺の手からコートを受け取ったのだが、そのまま立ちつくしてしまった。や、やばい。少女の布……一応服が今に

も落ちそうになっている。だめだ、このままでは！

「お願いしますから着てください！」

俺は半分泣いてるんじゃないだろうか？ とにかくそんだけ必死だった。

あ、落ち

「わあ！」

「ん？」

ん？ じゃねえよ！ とか口には出さないが、俺は本気で目を叩くようにして視界を覆った。しかし、ラッキ

ゲフン、ゲフン

勢い余って手が外れてしまい、少女をガン見する形になった。

………つて、あれ？

俺は不思議に思った。いや、当然だろう。俺の予想では少女は、ぜ、ぜんらのはずだったのだから。

しかし、目の前の少女は残ね

ゴホゴホ

世の中の男子を嘲笑うかのように服を着ているではないか！ 何だよ、思わせぶりのそぶりしやがって。とか決して思ってたなどない。思ってたないぞ。

実際に、こんなところ他の奴らに見られたらあだ名が「変態野郎」や「ナンパ野郎」、もしくはもっと卑猥なものになってしまうだろう。

それはとにかく置いてくとして、少女は服を着ていた。それだけ分かればいいじゃないか。うんうん。

（なにを納得してるんだろうか………）状況はお分かりになられただろうか？ これにて良志人ビジョン終了。

良志人は、とにかく唾然としていて、口をこれでもかというほど開き、「はあ？」と、さも言いたげな顔で少女を見ていた。



ホントは良志人の叫び声が「きゃあああああ！」だったのは  
秘密。

## 出会い（後書き）

展開の仕方が意味不明だった人ごめんなさい。

## 夢とかロマンとか、そんなの

コンクリートに沈んでから数分、良志人は自室で目が覚めることになった。

「は？」

目が覚めてからの一言がこれである。「は？、まさにこちらのセリフ。

「夢……か？」

伝わらないだろうが、夢でないという事だけ言っておこう。

ふにっ

「は、この感触はッ!？」

不意に、良志人の手に柔らかいものが触れた。只今、良志人はベットのの上において、隣には羽毛布団にくるまった先程の少女程の大きさの“なにか”がくるまっている。

ゴクッ

「よ、よし」

良志人はいやらしく生唾なま唾を飲むと、何やら手をワキワキさせて布団を剥がしにかかった。

「は？」

布団を剥がして出てきたものは毛布もふだった。まぎれもない毛布。

しかし、良志人には見覚えのない毛布だった。今さら、良志人には関係のない内容だったが。

「とおお!!」

奇声とともに毛布を剥がす、がまたもや出てきたのは毛布。

「せいッ!」

お次はバスタオル。

「いい加減諦めろおおお!!」

ぽふっ

ゴロッ

出てきたのは何の変哲もな……何処か禍々（まがまが）しい黒いクッションと、何の変哲もない黄色い懐中電灯だった。

「……………」  
良志人は電源の切られた玩具のように急に沈黙した。先程までの情熱はどこへやら……。

「ふっふ、ふっふ、ふ」

数秒もしないうちに良志人は壊れた。いつかはそうなるだろう、と思っていたが……。良志人は笑いながら禍々しいクッションと黄色い懐中電灯を掴むと……

「こんなの期待してたわけじゃねえんだよおおおおお！！」  
絶叫しながら外に投げた。

ヒュウウウウウ

確かに良志人は投げた。しかし、“それ”はブーメラン宜しく返ってくる。

「くそっ」

床を叩いて悔しそうにしている良志人は、その二つの物体に気づかない。

ゴツッ

良志人本日二度目の気絶。

夢とかロマンとか、そんなの（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

少女を拾い、拾われて…

良志人よしひとが気を失ってから目を覚ましたのは見知らない部屋だった。

「は？」

「何か？」

ピコピコ

「は？」

「何か？」

カタカタ、ピコピコ

「え、だから、何で？」

「なんで、と言いますと？」

カタカタカタ、ピコピコピコピコ

先程の少女が必死にコントローラーを握っている。

「なんでF〇エラエ〇やってんだよおおおおお！！」

テテテテテテ、テツテテ

「あ、レベルが……」

「レベルが、じゃねーよ！！」

良志人は少女のコントローラーを奪い取り、

ベキッ

へし折った。少女はそれを見てしばらく沈黙、良志人は息を吸い込んだ。

「……ああああああああ！！」

「何で俺は拉致さらしられてんだよ！」

少女の叫びと良志人の叫びが重なった。

「ラチって、何を人聞きの悪い！ 倒れたアナタを私の家まで運んで丁寧かつ、丁寧に看病してあげたんじゃないですかー！」

「え！？ あ、おう、そ、そうだったのか……。えと、あ、一応ありがとうございます……。あ、あと、ごめんなさい“これ”」

良志人はへし折ったコントローラーを少女に差し出しながら本当

に、本気で申し訳なさそうに言った。少女の方はというと、今頃思  
い出したかのように放心している。

「……………あれ？」

「あの、コントローラー……………」

「あ、別にそのコントローラー……………わあ……………」

「だ、だから、悪かったです、すいません！」

「起きてるうううううううう！！！」

「そこかよ！！！」

良志人は驚いた。少女が良志人が起きた事に気付いてなかった事  
に。

「と、とにかく、コントローラーは？」

「あ、それは、ほら」

ポンッ

何でも無いかのように、コントローラーを直して見せた。

「え？ 何やりました？」

「まあ、それはやる気と根性と想像でカバーして」

「想像はまだしも、やる気と根性が微塵も感じられん！」

良志人は下品に唾を飛ばしながら、少女を怒鳴り散らした。少女  
は汚そうにハンカチで顔を拭くと

「けツ、汚ねえな」

「え？」

急に性格が変わった！？……………ちなみに「けツ」と言った方  
が少女。良志人は何があつたのか分からないといった顔をしていて、  
少女の方はとうとうしまったといった顔をしている様……………

「ああ？」

ひっ！ 気のせいだったようです、はい……………。

「今、なんて？」

「いえ、蠅が」

会話になってないのは置いといて、少女は先程のボロ布は体に巻  
いてはいなかった。それで、ボロ布の方は良志人にかけている。

いつては何だが見た目はかなりひどく、本来の家庭なら捨てられてもおかしくない程汚かった。“それ”をかけられている良志人はかけられてることにすら気づいてないように思える。

「虫？ 言われてみればやけに多く って、汚なっ！」

そう言っているそばから自分にかけられているものに気づいき、勢いよく跳ねのけた。むしろ言ったから気づいたのかは定かではな  
いが……。

良志人の跳ね飛ばした毛布は

ポロ布  
バサッ

と、少女の顔に覆いかぶさった。

「ふが！」

「あ、すまん」

「むがぐふがふが！」

「すまん、何言ってるか分からない」

「むがああ！」

「すまん、わからん」

これは、なんという……。もちろん、良志人の性癖の異常さは伝わっていると思うが、ここまで来るとこちらとしてもど  
ん引きする以外対処が出来なくなってしまう。

というか、見てないでとっと少女のポロ布という名の毛布を取っ  
てやれば解決するのではないかと思うのだが、良志人の頭では考え  
られないようだ。

「むぐう」

あ、死んだ。

「おい、大丈夫か？」

そう言いながら良志人は少女の毛布を取ってやった。焦らしに焦  
らしてやっとなら解放してやるとはさすが超変た

ヒュッ

「いやー、それにしても蠅が多いな」

良志人は笑いながらそう言つと、近くに飛んでいた蠅を握りつぶ

した。(こわい!)

少女はと言うと肩を激しく揺らし呼吸を整えている。

「ぜえ、ぜえ、ゲッフガハッゴッフ」

……あんまり女の子らしくない、のは置いといて少女の顔は酸素が足りないためか真っ青になっていた。

「大丈夫か？」

お前の目は

「節穴か!!」

「ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

(なんか台詞盗<sup>セリフ</sup>られた)少女は叫びながら良志人の腹(主に下腹部)を蹴り飛ばした。蹴られた良志人は声にならない悲鳴あげて抑えていた。色々なものを。

「何が……」

「だまれ」

「ぐすッ」

「うっ」

む、酷<sup>むご</sup>い。少年が気絶してるのはともかく、少女の性格が豹変しているのは気のせ

「さつきからうるせえぞ!」

ひっ!

「黙って聞いてればゴチャゴチャぬかしやがって!」

少女は少年の方を見ると……少年の方?

「お前だよ、お前!」

ガシッ

少女はそう言って私を掴むと

「って、なに掴んでんですか!?!」

「何って、お前だよ」

少女は当然のようにそう言うとそのまま続けた。

「さつきから部屋の隅でぶつぶつと! 根暗かお前は!」

「いやいや、そういう事じゃなくてですね、私はここには存在しな

いんですよ？ 分かりますか、おーけー？」

必死の説明をしていると言うのに少女は首をかしげる。

「目の前に人がいるのに独り言って、お前頭になんか湧いてるのか？」

「地の文から引きずり出されるとか、死にたい……」

私がそういうと少女は謝あやまって

「なんだお前、神オベレーターだったのか！

悪りいな、引きずり出しちまって

けど、たまにやっちまうんだ許せ」

「許せじゃないですよ！」

謝あやまる気はなかったようだ。

私は疲れたからここからは全自動フルオートでお送りおくします

「あ、逃げやがった」

少女が掴んでいた女は注意書きとともに消えた。

「う、うう」

良志人のうめき声を聞くと少女は肩をすくめ

「こいつも起きる事だし、そろそろ戻るかな」

“元の場所”へと帰って行った。

「ムニヤムニヤ」

「う、う」

残ったのは気持ちよさそうに眠っている少女とうめきながら気絶している少年だった。

少女を拾い、拾われて…（後書き）

ぐっただですが読んで頂いた方どうもありがとうございます。しかし！これがいつか伏線になってもっと大きな話になるはず！！…です。きっと。誤字などがあれば指摘して頂けるとありがたいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4789u/>

---

魔王を倒したはずの勇者様は街に帰って来ていません

2011年10月9日10時53分発行